論　文

大学と街路市の教育的連携による効果

―農産物の収穫と日曜市の販売体験を事例に―

Effects of an Educational Collaboration between a University and a Street Market:
A Case Study of a Field Experience with the Harvesting and Sale of Crops

中村　努（高知大学教育学部）

NAKAMURA Tsutomu

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

This article examines an educational collaboration between a university and a street market, arranged as part of the university's educational program. Students spent two days experiencing the harvesting and sale of crops. The article analyzes the feedback that the students shared in class after the field experience and suggests recommendations for enhancing the educational effectiveness of such experiences. The students' impressions are divided into two categories. First, their observations of the participants included frequent comments on the amount of manual effort involved and on the farmers' fondness for their work. Second, the students offered many suggestions for improving methods of marketing or customer service. Their recommendations for the future of the Sunday street market included some comments related to socio-cultural values and others related to tourism. The students found it difficult to propose a new approach to the Sunday street market, but the high educational value of the field trip was reflected in the degree to which the students displayed greater awareness of the complexity of the issues.

Ⅰ．問題の所在

本稿の目的は，街路市と学校教育との連携による学習効果を検証することである．街路市とは，広場ではなく，道路で市を展開する形態を指す．高知市の日曜市は典型的な定期市の街路市である（玉里・吉成，1999）．

高知市の街路市（特に日曜市）は現在，重要な観光資源の一つとして，主に高知県内で生産された土産や贈答品用の特産物を集荷する機能がある（第 1 表）．観光客が顧客の中心で，その分布範囲は高知県内にとどまらず，国外を含めた県外まで広範囲に及ぶ．その提供価値は，特産物の地域ブランドが有する希少性である．たとえば，前田（1998）は高知市の日曜市を事例に，来市客と出店者の両面から，観光資源としての特質を明らかにしている．

一方，街路市は依然として生活市としての側面を保ち，高知市内とその周辺というローカルなスケールで完結する流通システムを構成している．また，生産者同士や，生産者と消費者とを結び付けるコミュニティ機能を有していると考えられる．生活市には，局地的生産物の交換という流通機能があり，生産者はおもに高知市内とその隣接市町村に分布している．顧客として，公共交通機関や徒歩によってアクセスする常連客が想定されることから，その分布の範囲は高知市とその周辺にとどまる．その提供価値は，上記の流通機能に加えて，コミュニケーションの場としての社会文化的価値も含む．消費者にとってみると，商品の説明を受けることができる，安心・安全が担保される，買い物に旅情気分や懐かしさを感じることができるなどの利点があり，出店者にとっては，客とコミュニケーションを取ることで，商品の調理方法などを伝えたり，生きがいを感じたりすることができる．近年では，学校教育における地域学習の機会として街路市を活用する動きもみられる（中村，2015）．本稿は街路市をめぐる近年の状況を地誌学習のフィールドの一つと捉えて，大学と街路市の教育的連携の効果を検証する．

高知の街路市をめぐる近年の状況に関して，中村（2015）は，日曜市出店者へのアンケート調査をもとに，ローカルな流通システムの展開とその空間特性を明らかにした．特に，出店者の商品調達から販売に至る行動に着目し，全国的に衰退過程にある定期市が，高知市において存続している要因について検討した．その結果，モータリゼーションの進展と，そうした動きに対応したロードサイド型の大規模小売チェーンの大量出店は，街路市への顧客数の減少につながっているものと推測された．現在の出店者は，今後も出店継続の意思を示していた．しかし，後継者が確保できていないことが，多くの出店者にとっての課題となっていた．その反面，街路市は対面販売を基本としており，出店者は街路市に対して，顧客とのコミュニケーションに楽しみや，生きがいを感じたりしていた．こうした需給動向の変化に対して，代替販路として，直売所や市場，卸売業者などを活用する出店者がみられた．また，少量多品種生産による供給の不安定性をカバーするため，市場や卸売業者から一部の商品を仕入れている出店者がみられた（中村，2015）．

こうした対応は，生産履歴の開示や対消費者コミュニケーションの点において，街路市における自家生産物の販売に劣る．すなわち，出店者にとって，販売に伴う負担軽減や安定供給の困難性の克服を目的として，代替販路を確保することと，生産履歴の開示や対消費者コミュニケーションの充実を目的として，自家生産物のみを街路市で販売することとは，二律背反の関係にあるといえる．そのため，個々の出店者がどちらの目的を重視して，街路市への出店を継続し，商品を販売しているのか，その意思決定のあり方が，街路市の性格を大きく規定する要因となっているといえよう．生活市としての機能の維持を原則とするならば，需要は長期的に減少傾向をたどると推測できる．したがって，かつてと同様あるいはよりいっそうの経済効果を期待することは，観光振興なくしては人口構造上きわめて難しい．それでも，高知市が市税を投入して，生活市としての街路市の維持に努めるならば，生産農家の流通機能を担いつつ，一部の消費者ニーズを満たすことの社会的意義が問われてこよう．その場合，街路市を社会的インフラの一つとみなし，高知市全域の流通システムにおいて論じる必要があると考えられる．すなわち，街路市の再定義にあたって，周辺の流通機能とその配置，それらを規定する地域開発政策と併せて検討しなければならない．そして，誰が何のためにどのような街路市の活性化を望んでいるのか，市民全体で論点を共有したうえで，合意形成を図っていく必要があろう．

上記の議論にかかわる，自治体，出店者，大手小売資本，地元客，県外客といった異なるアクターは，それぞれ異なる価値を街路市に見出している．そうであるがゆえに，街路市のあり方を一つには定めようとすると，利害の不一致

第１表　街路市の流通に関する特性

目的	生活市	観光資源
流通機能	局地的生産物の交換	特産物集荷機能
生産者の範囲	高知市内とその隣接市町村	高知県内
顧客の範囲	高知市内とその隣接市町村	高知県外
顧客特性	交通弱者 常連客	観光客
提供価値	社会文化的価値	希少性 高い品質

資料：中村（2015）．

が生じる．こうした問題は，社会のあらゆる側面において少なからずみられるが，街路市をめぐる問題は，それ自体が地域固有の伝統や文化としての側面を多分に有するがゆえに，経済性のみでは方向付けられない，きわめて地理学的な要素を含んでいる．それはまた，地域社会の将来展望とかかわるため，地理教材として高い教育的価値を有するものと考えられる．

現状において，街路市を教育の場として活用する事例は，①高知市内の 3，4 年生社会科の副読本などにおける，日曜市をはじめとする街路市の紹介と授業への活用，②小学生の社会科見学としての街路市への訪問，③高知商業高校による日曜市をフィールドとした販売体験やイベント，④高知大学の講義やゼミにおける日曜市をフィールドとした販売体験やイベント，⑤県内大学生の日曜市サポートボランティアグループである Sunday Market Supporters（SMS）による観光案内所や休憩所の運営，などがある（高知市商工観光部産業政策課，2015）．これらは，短期的には来市客の増加に寄与し，その到達度が数値化によって把握しやすいものが多い．しかしながら，街路市の存立基盤を理解したうえで，街路市を将来どのように位置づけるべきか，そのあり方を長期的，かつさまざまな立場から考える教育的機会は少ない．したがって，街路市を大学教育における巡検の場として活用することで，学生に地理学の視点から検討する機会を与えることの教育的意義は大きいと考えられる．

Ⅱ．街路市の概要と研究方法

1．街路市の概要

高知市の所管する街路市は，日，火，木，金曜日の各曜市である（第 1 図）．農産物を中心として，田舎寿司や餅といった農産物加工品や，塩乾物，手作りの工芸品などが販売されている．このうち，日曜市は曜市のなかでもっとも規模が大きく，観光振興の手段として活用が図られている側面が強い．一方，火曜市，木曜市，金曜市においては，地元住民が日常消費する最寄品を購買する場所として利用する，生活市としての側面が強い．

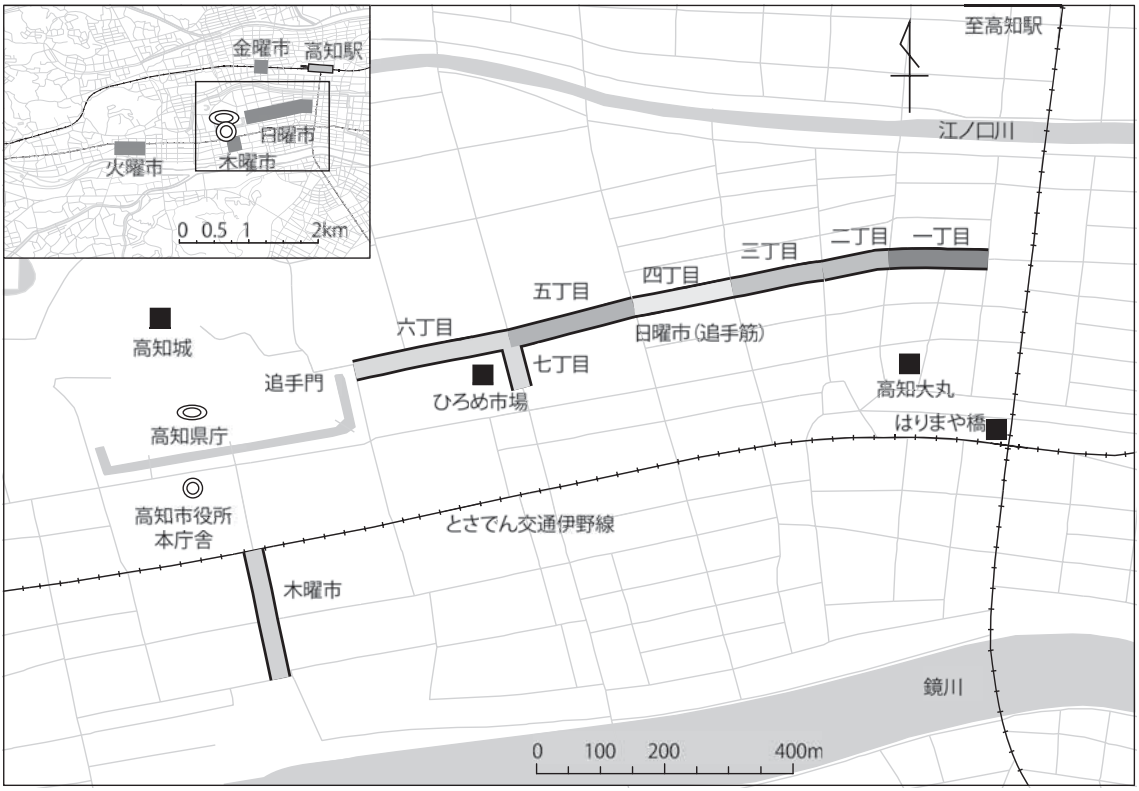
高知市では，2004 年度に日曜市基本調査，2005 年度には日曜市の経済波及効果分析調査を実施し，その結果を踏まえ，2006 年度に高知市街路市活性化構想を策定した．しかしながら，日曜市をはじめとする街路市において，出店者の高齢化，後継者不足，地元客減少などの傾向は強まっている（高知市商工観光部産業政策課，2015）．そこで，2014 年，新たに街路市活性化推進委員会が設置され，2015 年 3 月に街路市活性化構想が策定された．同構想において，街路市は生活市であるという基本的な方向性が明示された．そのうえで，①地元利用者，②観光客，③出店者，④景観，⑤教育・学び，の 5 つの視点における魅力と課題が抽出された．特に，後 2 者については，新たに設けられた視点である．具体的には，ごみ減量運動や空き小間の活用，学生による販売体験や児童の買い物体験といった学校教育との連携が挙げられる．これらは景観やコミュニティ機能といった生活市が有する社会文化的価値の維持に向けた取組みと位置付けられよう．

一方，前 2 者において，地元利用者と観光客の両者を射程に入れた活性化推進策が盛り込まれている．このことから，コミュニケーションの場としての価値を内包した生活市としてのストーリー自体を，素朴な雰囲気で楽しく買い物ができるという，観光振興の手段として生かそうとする姿勢がうかがわれる．

最後に，出店者の高齢化と出店者数の減少への対策として，出店基準の緩和が挙げられる．高知市は街路市を生活市と位置付けていることから，1998 年以降，出店者総数に占める生産者割合を 75%以上とすることを目標としてきた．しかし実際には，同値は 7 割に満たない状況が続いており，70%に回復させることさえ困難な状況である．そこで今後，生産者の出店を維持するとともに，生産者以外でも生活市の趣旨に沿う出店希望者の出店に結び付けるよう，出店基準を見直すことが明記された．また，出店の主体や方法についても，従来の個人以外の経営主体も検討されるなど基準の再考が予定されている．

これら一連の推進事業の検証について，各界有識者等で構成する関係者からなる高知市街路市活性化推進委員会が中心となって，構想で策定したプロジェクトや施策の実施状況と施策の効果の確認を行い，着実な計画実行と目標達成を図るとしている．検証と評価にあたって，①通行量，②出店者数の推移，③地元（高知市在住）利用者数，④観光客の満足度の比率，の 4 つの指標が設定された．いずれの指標においても，基準年度となる 2014 年度の従前値を上回る目標値が，目標年度となる 2024 年度に設定されている．

このことから，同構想は街路市の生活市としての特徴を保ちつつ，地元利用者を主とした利用者数と出店者数の拡大を通じて，観光客の満足度を向上させようとしていることがわかる．しかし，街路市活性化の成否を判断する材料が，上記の数値目標とするならば，出店基準の緩和にかかわる非常に難しい管理運営のガバナンスが求められる．なかでも，高知市内外の農産物加工品を含めた地域ブランドの販売の場としての機能をどの程度認めるかが課題となろう．従来通り，街路市の役割を局地的生産物の交換のみに限定すると，街路市の出店者数や地元利用客数のさらなる減少は避けられない．その一方，出店基準を緩和すれば，観光客を対象とした特産物を集荷する機能をある程度認めざるを得なくなる．このことから，構想において設定された数値目標には，生活市としての価値を，観光資源の手



第１図　街路市の分布
資料：『高知の街路市パンフレット秋冬編』により作成.

段として活用していくうえでの隘路が内在しているといえる．以上の議論は，中村（2015）において，指摘したところである．加えて，街路市のあり方をめぐる問題を検討するうえで残された課題の一つとして，学校教育との連携による学習効果の検証を挙げた.

2. 研究方法

本稿では，農産物の収穫と日曜市の販売体験を通じて，大学と街路市の教育的連携による効果を検証した．研究の方法は以下の通りである．対象とした科目は，2 学期に開講された「地誌学演習」である．地誌学演習は教育学部 2 回生以上を中心として選択履修する必要のある専門科目である．授業科目の到達目標として，身近な地域に関する理解を深めるとともに、地誌学的な地域調査の手法を身につけることとしており，街路市をその対象事例として取り上げることは適切であると判断した．課外学習（巡検）の機会として，農産物の収穫と日曜市の販売体験を 2 日間設けた．1 日目には，街路市の元出店者の協力を得て，農産物の収穫と加工の体験をし，翌日の 2 日目に，高知市シルバー人材センターの協力を得て，日曜市で収穫・加工した農産物の販売体験を実施した．巡検後にレポートを課し，次回の授業において，日曜市のあり方について論点整理を行った．そこで，改めて街路市の概要を解説することで，前節で述べた街路市のあり方について再考する機会を設けた．以下では，巡検後の授業において，共有された収穫・販売体験の感想と，日曜市のあり方について，内容を分析するとともに，より高い教育効果を得るための課題について考察する.

Ⅲ. 授業実施プロセス

1. 収穫・加工体験

街路市との教育的連携の取組みは，2014 年度より開始した．収穫と販売にあたっての反省点として，日程の都合上，両日の参加が叶わなかった学生がいたこと，11 月半ばの寒い時期にかかり，人通りも少ないうえに，地元の食材を売るのに苦労したことが挙げられた．以上を踏まえて，今年度は巡検の日程を 2015 年 10 月 18 日の全員が参加できる日程に早め，人通りの多い場所（日曜市 5 丁目南側の休憩所）で試食も用意したうえで，販売することになった.

街路市の元出店者に収穫依頼をしたところ，リュウキュウ，チャーテ，四方竹といずれも高知県内を中心として，生産，消費される農産物が収穫できることになった．四方竹については，収穫後の加工作業に人手と時間がかかることが予想された．そのため，10 月 17 日午前中の早い時刻に収穫地に訪問し，それぞれの農産物を手分けして収穫しながら，加工作業にあたった.

収穫作業においては，それぞれの農産物の特徴とともに収穫，加工，調理の各方法を学ぶことができた（写真1～3）．特に，四方竹の加工については，空気に触れると風味が落ちやすい食材であることから，多くの工程について空気に触れないよう，時間をかけて行う必要があることを実際の作業を通じて学ぶことができた．時間の制約上，実際に行った作業は一部にとどまった．その加工方法は，皮ごと四方竹を釜で茹で，皮を剥いだ後に，水にさらし，根元の固い個所は切り落とす，根元に近い部分は細かく切る，というものであった．その後も一晩かけて，空気に触れないように水にさらした状態にしておく必要があり，元出店者に以降の作業を依頼した．

持ち帰ることになったリュウキュウやチャーテについては，実際に調理したり，食べたりした経験のない学生がほとんどであったため，作業後にそれぞれの自宅に持ち帰り，調理して試食するよう促した．試食用のリュウキュウとチャーテを使った料理は教員側で用意した．さらに，当日までに値札や宣伝用のポップ広告を作成するよう指示した．なお，試食用のレシピについて，学生が事前に調べた内容を紙媒体に印刷し，販売時に配布する予定であった．しかし，印刷機の不具合でレシピを用意することができなかったため，口頭で説明することになった．

2. 販売体験

10月18日の午前8時に現地集合し，午前11時まで販売体験を行った（写真4）．当日，四方竹の配送を依頼した出店者の隣のスペースが休憩所だったこともあり，この場所の一部を販売体験用に借りた．リュウキュウの酢の物とチャーテの炒め物を試食用に用意し，農産物自体を知らない県外客に対して，調理法の提案を行った．

その結果，人通りが前回とは異なって多かったこともあり，地元客以外の農産物を知らない客にも食べ方を伝えることができた．試食がなくなった後，リュウキュウが売れ残っていたため，皮を剥いで，薄くスライスした状態で袋詰めにして売ることを提案した．この下処理の作業を見せること自体が，実演販売による広告効果をある程度発揮したと考えられる．実際に，下処理が終わりすぐに調理できる状態であるため，処理をしていないリュウキュウよりも売れ行きはよかった．接客方法や販売方法における問題点はあったものの，隣接する出店者の助言や地元の一般客による調理法の助言もあったおかげで，新しい調理法や販売方法を学ぶことができた．学生にとって，対面による接客および販売の体験は，街路市が消費者や出店者同士のコミュニケーションの場として機能していることを実感できる貴重な機会となった．

以上の収穫・販売体験の様子は，高知市シルバー人材センターが運営する facebook のホームページにも紹介され

写真1　リュウキュウの収穫体験の様子
資料：筆者撮影．

写真2　チャーテの収穫体験の様子
資料：筆者撮影．

写真3　四方竹の加工体験の様子
資料：筆者撮影．

た（第 2 図）．これは，情報提供を強化する目的で，街路市の教育的価値をアピールする取組みの一つと位置付けられる．

Ⅳ．結果

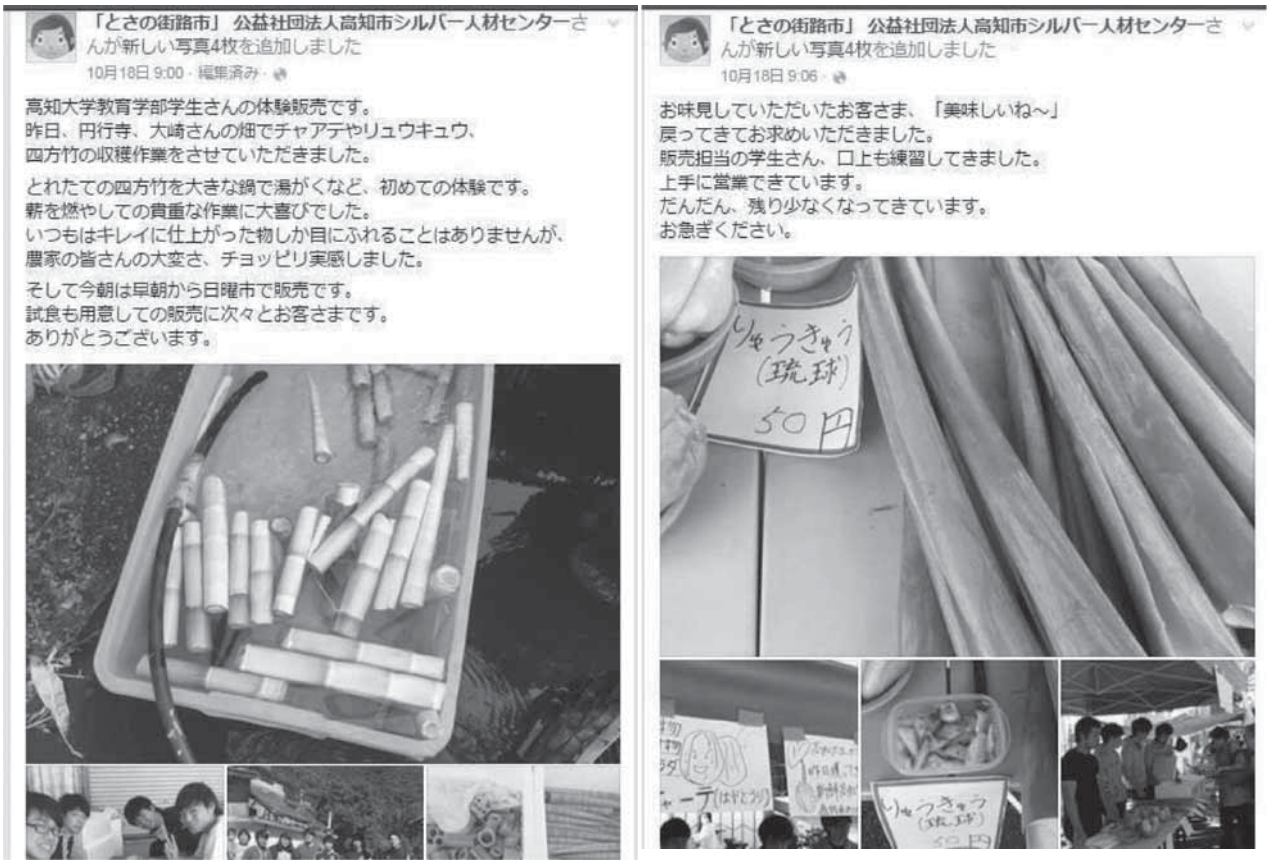
1．収穫・販売体験の感想

本章では，収穫・販売体験後に課した学生レポートの内容を分析することで，街路市を巡検に設定したことによる教育効果を検証する．レポート課題のテーマは，①収穫・販売体験の感想，および②日曜市のあり方について，A4 用紙 1 枚以上の分量を課した．

収穫・販売体験の感想は，農家や出店者が抱いているであろう感情の共有と，自らが収穫・販売を体験したことで感じた反省点に大別できる（第 2 表）．前者では，農産物の収穫や加工作業にかかる労力や農業に対する思い入れの強さなどが挙げられた．また，「日曜市が出店者にとって，商売をする場というだけではなく，社会とかかわる場，多くの人とコミュニケーションをとる場として活用されている」「出店者と客との間，出店者同士の間でも活発に交流がなされている」「収穫や商品の説明の仕方など，多くの場面で農家や出店者に助けられ，人の温かさを感じた」ことも指摘された．

後者では，収穫体験による苦労とともに，素通りする観光客への販売に苦労したことから，販売や接客の方法を改善するうえでの反省点を中心とした記述が目立った．たとえば，「通行人の目に留まる看板や値段表示を考える」「加工や調理方法を知っておく必要がある」「外国人観光客など様々な買い手に対応するためにコミュニケーションの手段を考えておく必要がある」「短い時間で商品の魅力を伝えるための呼び込みやレイアウトの工夫が不足してい

写真 4　日曜市における販売体験の様子
資料：筆者撮影．



第 2 図　収穫・販売体験の様子が掲載されたページ
資料：高知市シルバー人材センターの facebook ウェブサイト．

た」「観光客は高知県の特産品について知らない人が多いため，調理法に加えて商品そのものに対する説明を取り入れる必要がある」といった回答がみられた．一方，「店頭での呼び込みが効果的であった」「加工したリュウキュウを袋入りで売れば付加価値を付けて売ることができる」といった，昨年度の反省を踏まえた販売上の工夫を積極的に評価する意見もみられた．ただ，リュウキュウの袋詰めについては，教員側からの提案による工夫であった．学生から売れ行きの悪さの原因を分析したうえで，自ら販売方法の改善案を提示できるような指導上の工夫が求められる．

2. 日曜市のあり方

日曜市のあり方に関して，生活市としての社会文化的価値を重視する回答と，観光資源としての価値を重視する回答に分けることができる．第2表において，それぞれの回答のうち，該当する価値を重視した回答には○を記した．また，短期的目標としての，出店者や来市客を増加させる方策を提案している回答に○を記した．

生活市としての社会文化的価値を強調した回答としては，「高齢者が社会とかかわり，人々と交流する場は有効に活用されるべきである」「日曜市は市場としての役割だけではなく，地域の交流の場になっているため，文化や歴史に至る広い視点でとらえる必要がある」「商売のことだけを考えているのではなく，人間関係を形成することができる場所としての存在価値がある」が挙げられた．

観光資源としての価値を強調した回答としては，「観光

第2表　学生のレポート内容

収穫・販売体験の感想		日曜市のあり方	生活市	観光資源	出店者来客増
対農家・出店者	反省点				
・収穫や加工作業の苦労を通じて，農業に対する思い入れの強さを感じた．	・通行人の目に留まる看板や値段表示を考える． ・レンタカー代などを引いても黒字であった． ・店頭での呼び込みが効果的であった． ・地域住民ともっと関わり，理解を深めていきたい．	・宣伝や日曜市ならではの商品を開発したりして，観光客や地元客の支持を得るべきである．	○	○	○
・出店者と地元客のほとんどが高齢者であった． ・出店者にとって日曜市は，商売をする場というだけではなく社会とかかわる場，多くの人とコミュニケーションをとる場として活用されている． ・出店者と客との間，出店者同士の間でも活発に交流がなされている．	・短い時間で商品の魅力を伝えるための呼び込みやレイアウトの工夫が不足していた． ・観光客は高知県の特産品について知らない人が多いため，調理法に加えて商品そのものに対する説明を取り入れる必要がある．	・若者に日曜市を知ってもらう． ・若者が立ち寄りやすいような商品を扱う店をもう少し増やす． ・高齢者が社会とかかわり，人々と交流する場は有効に活用されるべきである．	○		○ ○
・収穫や商品の説明の仕方など，多くの場面で農家や出店者に助けられ，人の温かさを感じた．	・調理や下処理の方法など農産物に対する知識が不足していた．	・日曜市は市場としての役割だけではなく，地域の交流の場になっているため，文化や歴史に至る広い視点でとらえる必要がある．	○		
・四方竹の加工に大変な労力を要するとともに，手作業で農産物を加工する際には，慎重に作業する必要性を感じた． ・農家の努力や農産物のありがたみを感じた．	・加工したリュウキュウを袋入りで売れば付加価値を付けて売ることができる． ・収穫や加工の労力を踏まえた値段設定が難しい． ・加工や調理方法を知っておく必要がある． ・外国人観光客などさまざまな買い手に対応するためにコミュニケーションの手段を考えておく必要がある．	・商売のことだけを考えているのではなく，人間関係を形成することができる場所としての存在価値がある． ・観光客には，高知の自然の豊かさを感じる機会になる． ・地元の住民と県外客がわずかな時間で人間関係を築き高知の土地柄を紹介することができる．	○	○ ○	
・日曜市に出店できない農家の収穫作業を手伝うことで，若者との交流のきっかけとなる．	・呼び込みやポップなど効果的な販売方法を考える．	・若者が多様な手段で客の興味をひかせる必要がある．			○
・農家が大変な苦労をして収穫や加工，販売の作業をしていることが分かった．	・収穫から販売までの作業を6人で行っても大変であった．	・臨時出店したい人を数多く募る． ・出店者の負担を軽減するため，ボランティアを募集したり，販売体験を積極的に行ったりする．			○ ○

資料：学生レポートより筆者要約．

客には，高知の自然の豊かさを感じる機会になる」「地元の住民と県外客がわずかな時間で人間関係を築き高知の土地柄を紹介することができる」が指摘された．観光振興の側面を強調すると，特産物を集荷する機能を促進することが選択肢の一つとして指摘できよう．ところが，学生の回答を見る限りにおいて，観光客を対象とする場合にも，コミュニケーションの場としての価値を内包した生活市としてのストーリーを重視し，その価値自体を観光振興の手段として生かそうとする姿勢がうかがえた．

短期的な出店者や来市客の増加に結び付けるための方策としては，①「宣伝や日曜市ならではの商品を開発したりして，観光客や地元客の支持を得るべきである」「若者が立ち寄りやすいような商品を扱う店をもう少し増やす」といった，出店者の商品開発をはじめとする創意工夫の必要性を指摘するもの，②「若者に日曜市を知ってもらう」「若者が多様な手段で客の興味をひかせる必要がある」といった，若者が街路市に興味をもつきっかけをつくる必要性を指摘したもの，③「臨時出店したい人を数多く募る」「出店者の負担を軽減するため，ボランティアを募集したり，販売体験を積極的に行ったりする」といった，出店者の負担軽減や新規出店の促進の必要性を指摘したもの，に整理できる．

3. 街路市を活用することによる教育効果と課題

授業中では，Ⅳ章１節および２節で紹介した内容を各自発表してもらい，板書を通じて情報共有した．そのうえで，街路市の置かれている状況について，中村（2015）をもとに解説した．出店者数は減少の一途を辿るとともに，高齢化と後継者不足に悩む出店者が多い．来市客については，日曜市の来市客を対象としたアンケート調査によって，その利用理由が明らかにされている．出身地別にみると，高知市内の利用者は，「季節感を味わえるから」や「品物が新鮮だから」と回答する割合が高い一方，県外客は「地元のものが買えるから」や「素朴な雰囲気を味わえるから」と回答する割合が高く，出身地によって理由に差が生じていた（中村，2015）．

すなわち，街路市は観光資源として活用されているものの，単に特産物を集荷する機能を有しているだけではない．むしろ，地元客に地場産品を購入するための，生活市として認められていることこそが，素朴な雰囲気を醸成し観光客にとっての魅力につながっていると結論付けた．今後，生活市としての社会文化的価値を維持するためには地元客が積極的に利用していく必要がある．それでは，地元に居住する，特に若い世代が街路市を利用するようになるにはどのような対策が可能かを考えてもらった．意見を出しやすいよう，若い世代を学生自身に置き換えて，「自分であれば，どのような街路市になれば訪問するようになるか」について意見交換した．

それらをまとめると，①日中ではなく夜間にも市を開設する（営業時間の延長），②大学キャンパスや自宅と近距離に開設する（交通アクセスの改善），③生鮮品とそれらを加工した商品を同時に販売する（品揃えの充実，加工による付加価値化），であった．しかし，これらをすべてクリアできた場合でも，街路市で実際に買い物するか問うたところ，「訪問しない」という回答が多数を占めた．その理由は，学生自身が述べていたように，地場産品は，高知県外出身者の割合が多い学生にとっては食べ慣れていない食材が多いことにある．また，そもそも自炊する機会がこれまでなかったため，生鮮品を購入する潜在顧客でもなかったことが大きい．これらは学生の日常の食生活にかかわる問題である．これまでスーパーやコンビニエンスストア，弁当屋や外食などでその出所を問わずに簡便に食事を済ませる生活を送っていれば，生活市としての価値を感じる機会が身近にあったとしても，それを価値と認められないのは当然であろう．

上記の議論は，決して学生の食生活のあり方にのみ原因が求められる問題ではなく，日本における流通構造と食生活の変容という構造的な問題から捉えられるべきものと考えられる．一方のメーカーは，国際的原料調達ネットワークのなかで，効率的な大量生産体制を構築している．他方のスーパーマーケットは，セルフサービス方式のチェーン展開によって，仕入れコストを抑えながら大量販売体制を構築している．両者のなかで流通する食料は，生鮮品であっても国境を越えて広域化しつつあり，消費者はこの恩恵に預かって安価にさまざまな食糧を購入することができるようになった．しかし，消費者から生産者の顔がますます見えづらくなっている．このことは，効率化の追求のために，街路市が有しているような，社会文化的価値がそぎ落とされた結果といえるのではないか．われわれとて，経済成長を優先するなかにあって，そうした価値を切り捨ててきたとはいえまいか．

その反面，高知市は市税を投入して街路市の維持に向けた支援策を継続している．道路使用に対する積極的態度や，厳格な出店者基準に街路市のもつ社会文化的価値を認める姿勢がうかがえる．また，資本力の弱い農家の生産物を即座に現金化しうる手段の一つとして街路市を位置づけることは，結果として地産地消の流通システムを維持することにもつながる．こうした市政のあり方に市民がどのような態度をとるのか．街路市の有する多様な価値に対する市民の評価が，街路市のあり方に深くかかわっているといえよう．

以上の論点は，問題構造のスケールが大きいためにやや複雑であり，時間の制約もあって，講義中に触れることができなかった．しかし，日曜市のあり方について容易に答

えを導出できないという，問題の複雑さに気付く機会を得たこと自体が，街路市の地理教材としての教育的価値の大きさを示唆している．巡検に要した時間は，2 日間のそれぞれ午前中に過ぎなかった．それにもかかわらず，学生のレポートからは，街路市の生活市としての社会文化的価値にそのあり方を見出した回答がみられた．したがって，街路市の存立基盤を理解したうえで，街路市を将来どのように位置づけるべきか，そのあり方を長期的，かつさまざまな立場から考えられた点において，一定の教育効果が得られたとみることができよう．このことから，街路市をめぐる問題は，その問いの立て方次第で，地域社会の将来展望にもかかわる，地理教材として高い教育的価値を発揮しうると結論付けられる．

Ⅴ．おわりに

本稿では，街路市を大学教育における巡検の場として活用することで，大学と街路市の教育的連携による効果を検証した．課外学習（巡検）の機会として，農産物の収穫と日曜市の販売体験を 2 日間設けた．巡検後の授業において共有された，収穫・販売体験の感想と，日曜市のあり方について，内容を分析するとともに，より高い教育効果を得るための課題について考察した．

収穫・販売体験の感想は，農家や出店者が抱いているであろう感情の共有と，自らが収穫・販売を体験したことで感じた反省点に大別できた．前者では，農産物の収穫や加工作業にかかる労力や農業に対する思い入れの強さなどが挙げられた．後者では，収穫体験による苦労とともに，素通りする観光客への販売に苦労したことから，販売や接客の方法を改善するうえでの反省点を中心とした記述が目立った．日曜市のあり方に関して，生活市としての社会文化的価値を重視する回答と，観光資源としての価値を重視する回答に分けることができた．

巡検後の授業の結果，学生は日曜市のあり方について容易に答えを導出できない状況に直面した．しかし，そうした問題の複雑さに気付く機会を得たこと自体が，街路市の地理教材としての教育的価値の大きさを示唆するものであった．

今後の課題として，時間の制約上，出店者以外のさまざまなアクターの立場を踏まえて，街路市を位置づけることができなかったことが挙げられる．今回は，そもそも事前の知識の提供が不十分な状態で巡検に臨んだ．しかし，知識が少ない状態がかえって，巡検によって得られる驚きや感動などの感情に訴求する効果を高めた可能性がある．これについては，事前の座学形式による街路市の全体像の理解が，巡検による教育効果をどの程度高められるのかを検証するなど，指導法と教育効果との関連性についてさらなる調査が必要であり今後の課題としたい．

謝辞

本稿の作成にあたり，高知市商工観光部産業政策課（街路市係）の藤村浩二係長，公益社団法人高知市シルバー人材センターの街路市活性化事業コーディネーターの濱田末子氏，恒光等氏には，農産物の収穫と販売にかかる手続きにおいてご協力いただくなど格別な配慮を賜りました．また，元日曜市出店者の大﨑節子さんには，農産物の収穫作業にあたって多大なご協力を賜りました．この場を借りて感謝いたします．

文献

高知市商工観光部産業政策課（2015）:『高知市街路市活性化構想』高知市商工観光部産業政策課.

玉里恵美子・吉成直樹（1999）:「土佐の定期市に関する覚え書き（1）―日曜市の実態を中心に」高知女子大学紀要社会福祉学部編 48：95-112.

中村　努（2015）:「高知県高知市における街路市の展開と流通システムの空間特性」E-journal GEO10（印刷中）

前田裕史（1998）:「高知市日曜市の観光地化」高知大学地理 2：64-84.